

佛教研究

第貳卷 第貳號

——上宮御製疏研究號——

三經義疏研究序說

佐々木月樵

聖德太子及び其事業そのものを研究考察するには、先づ以て廣く之に關する内外の因縁を明かにすると共に、正さしくその根底となり、また常に事業のプランとなりしそのものを明かにすることを要する。

聖德太子を知るに聖德太子に就てのみ之を知り、その時代を知るに、その時代のみのことを尋ねてその真相を明かにすることは不可能である。近くは、國史の研究が、今日にては、寧ろ朝鮮史若くは支那史の研究に待つにあらすば、その功を治むる能はざるが如くに、我太子及び其事業も、ま

た同時代若くはその已前に生じたる三韓支那の出來事を知悉することによつて初めてその眞意義を明かにすることを得るのである。思ふに、我太子の今日の所謂文化運動とも名くべき種々の施設や事業等は、太子御自身には他にそれだけの手本があり、また外縁や刺激があつたから出來たのである。今日、我國史の研究が、漸次朝鮮支那に移り行きたるが如くに、また我太子の眞研究も、また必ず同一歩調に進まねば、恐くはその眞相を發揮することは出來ぬ事と思ふ。太子はいふまでもなく、我人文史上、大陸文明の輸入者であつた、然り而して、其師慧慈、慧聰の如きは、正さしく朝鮮人であつた。されば、後世、我國人によつて、今日まで傳へられた所の所謂外的傳記のみにては到底その眞精神の得らるゝ筈はないことと思ふ。因て、吾人は、先づ以て、第一に當時往復頻繁なりし所の朝鮮、支那の文明を研究することを要する。何となれば太子をそだて、また太子が攝取し來つた所の大陸文明を知ること、やがてまた最も內的に我太子を知る捷徑であるからである。

更に吾人が茲に改めて一般國史の研究上、殊に文化史的にその研究方法として、先づ以て内外の學界に提唱したきことは、數年來、予が持論として有する所の佛敎經典と國史殊に我國の人文との關係そのことである。恐くは、我國の歴史は、此關係を無視しては、殆んで國史の一頁だも、その意義通りには、之を讀むことは不可能と思ふ。奈良朝時代を研究する人が、若し早く當時唐招提寺を中心として四分戒律等の弘傳盛なりしことを知りしならば恐くは、「法師一看」の文に淺間しき間

違ひも生ぜざりしなるべく、或はまた『金光明經』の「王法」若くは「除病品」等をば、我國の史家が研究しつゝありしならば、今更の如くに今日のやうな外的慈善事業の範は之を外に求めず、内的自覺によつて社會事業も成功したことと思はる。現に太子の十七個條の憲章の如きも、その思想の根元たる勝鬘の十大受三誓願を知らずには、恐くはその精神を把持することは出来ぬ。要するに、我國の人民が如何に我佛教と關係するかは、我政府が維新以來莫大の費用を投じて採集しつゝある所の大日本史料は、今日までの結果によると、殆んどその三分二までは我佛教に關するものであり、若しそれ、寺有若くは佛教の寶物をば、博物館からして除去したならば、全體あとに何物か殘る所のものがあるであらうか。誠に我日本の人文は、その多くは、寺のうちにて生長した。さうして、正さしく之を生みし所の母胎は、これまたその時その時に傳來して一般に信仰されし所の經典そのものであつた。かゝる見地よりして、我日本文化史を考察すると、吾人は、寧ろ、奈良朝時代の如きは正さしく、『華嚴經』『金光明經』等の時代と名け、平安朝は之を『法華經』『大日經』『觀無量壽經』等の時代とし、鎌倉は『大無量壽經』『維摩經』等、足利は『般若經』『首楞嚴經』等とその時代時代を名のるの妥當なることを信ずる。これらの事に就ては、『日本文化經典』の第一篇たる『華嚴經夜摩天宮會解説』序にも論述し置きたれば、今は之を略することゝする。然し、その經典には、いろ／＼な種類がある。或は、『地藏經』の如き、『藥師經』の如き、或はまた『觀音經』の如き民衆經典もあれば、

或はまた『金光明經』の如き、『仁王經』等の如き、さてはまた『法華經』の如き國家經典も存する。然り而して、また民衆的にもあらず、また國家的にもあらず、國民そのものゝ上に常に理想そのものを表現し行く所の『大無量壽經』『華嚴經』等の如き國民經典もあれば、一口に經典といへど、もごより一概に論すべきことは出来ないのである。否な、一往かくの如く、その基調を異にするも、またその國とその時代とによつて、同一經典と雖ども、その表現より見れば、印度にては、民衆的であつたものが、支那にては全く國家的表現を示し、また日本に來つては、それがそのまゝ國民經典となつて國民的精神を教養する等、一經がそれゝその國、その時代、その信奉者によつて種々の姿をもつて居るのである。吾人は、また是の如く、同一經典が種々の表現を示すその所に反つてその國の特徴やその民族の特性を見るのである。思ふに、かくの如くにして、初めて、我人文はそれゝその國民の上に特殊の色彩を加へ、殊に我國民の如きは、之によつて初めて文化としては、正さしく佛教文化を有することゝなる。げに、我聖德太子は、かゝる意味に於ける體現者にして、少くとも、かゝる意味に於ける我日本文化は、正さしく我聖德太子に始まるのである。果して然らば、聖德太子及び其事業等を研究考察するには、先づ以て何よりも先きに、太子は佛教經典中では、如何なる教典を信じ、また常に何經を手本とし、何經によつて當時の國民を啓發し、如何なる理想の下に社會的施設をなされしかを明かにすることを要する。これ實に、內的に我太子を知るの明鏡にし

て、また當時の社會を開く所の根本秘鍵かと信ずる。

そも／＼、古來太子の傳記は、『日本書紀』三十二卷を始めとして、殆んど何れの國史の上にも記せざるはない。また別傳としては、古きは思託の『太子菩薩傳』を始めとして、『補闕記』『法王帝說』『平氏傳』『私記』『口決抄』『平氏傳勘文』『御記』等、更に近時のものに至つては、今日一々記するに遑あらぬことである。これらの傳記は、何れも皆な我太子の生涯を傳へては居る。即ち三寶興隆といひ、冠位制定といひ、憲章欽定といひ、隋日國交といひ、大小内外の事實は、大約殘す所なく、更に茲に加ふべき餘地もなきことゝ信ずる。されど、吾人が先きに開陳したりし所の卑見にして、若し正當なりとせば、その實、未だ太子の眞實相及び太子の内的精神に至つては殆んど今日まで明かになつて居らぬことゝなる。否な、かゝる人文史的、殊に日本佛教經典よりしての研究に至つては、恐くは今日今後よりして始まることゝ思ふ。然り而して、今此見地に基く時は、我太子の眞研究は、從來の研究の如くに、家系や、父母や生誕の年時等をば、その出立點とせずして、正さしくその端をば、傳中講經の一事實よりして出發することゝなる。

「〔推古天皇十四年〕秋七月、天皇〔推古〕請皇太子〔聖德太子〕令講勝鬘經三日說畢之。

是歲、皇太子亦講法華經於岡本宮、天皇太喜之。播磨國水田百町施于皇太子。因以納三千班鳩寺。」〔日本書紀』三二〕

「(推古天皇十四年)七月、天皇詔皇太子云、宜於朕前講勝鬘經。太子乃握麈尾、登師子座。三日講經、其儀如僧。講演竟夜、蓮華雨零、花長可二三尺、而溢方三四丈之地。天皇覽之。即於其地、誓起堂宇、今橘寺也。吾昔爲勝鬘夫人時、釋迦如來說勝鬘經。以其因緣、今則講說是經。亦製義疏。」

天皇亦詔太子、於岡本宮、令講說法華經。亦如僧儀。天皇大悅。以播磨國水田二百七十餘町、施皇太子。件田初納法隆寺。後割中宮寺。中宮寺、是太子母后之宮也。」

「十七年四月八日、太子始製勝鬘經疏。」

「二十年壬申正月十五日、太子始製法華經疏。」

「二十二年申戌正月八日、太子始製法華經疏四卷。」

「二十八年庚辰、上宮太子與蘇我大臣馬子、共錄天皇記及國記。」〔扶桑略記四〕

是等の史實によれば、聖德太子には講經のみならず、『勝鬘經』『維摩經』及び『法華經』の疏をも製しになつたこととなる。ところが此三經の講義及び製疏に關する歴史的問題に就ては、今は全て各論に譲ることとする。實は、その講經の年月日、製疏の有無問題に就ては、古來種々の問題ありしなれど、最早や今日にては、三經の講述と製疏の義は、既に天平二十年六月十七日行信大德の註記たる『法隆伽藍緣起並流記資財帳』及び覺賢の編にかゝる所の『班鳩古事便覽』にそれ々々明記する所

あれば、蓋し何人も疑難を加ふ事は出来難いことと思ふ。果して然らば現存の疏が之れであるかどうかは別として、少くとも太子にあつては、『勝鬘經』『維摩經』『法華經』の三經を信じ、また之によつて自から講じ、また製疏なされたことは明かと思ふ。さて、その製疏に就ては、自から講經なされし如くに、太子自から執筆遊ばされたかといふに、これに就ては、いろ／＼の説あるべし。恐くは、冠位の制定、憲章の欽定等と同じく、予はその師、覺智、慧慈、慧聰、觀勒等の之に與りしものと信する。之を要するに太子を內的に知り、またその施設の眞義をも明かにせんと欲せば、是非とも『三經』の根本精神を明かにし、また能く『三經疏』の歸宗する所を研究するの外はない事と思ふ。

思想は事實の核心にして、教を信するものにあつては、經典は正さしくその人の指導原理である。かゝる意義によつて太子及びその事業を考察する時は、太子の三經疏の研究は、やがてまた太子の眞研究であり、またその事業の根本研究であることを忘れてはならぬ。